



第79図 建物群

## 第3節 掘立柱建物

### 1. 概 要

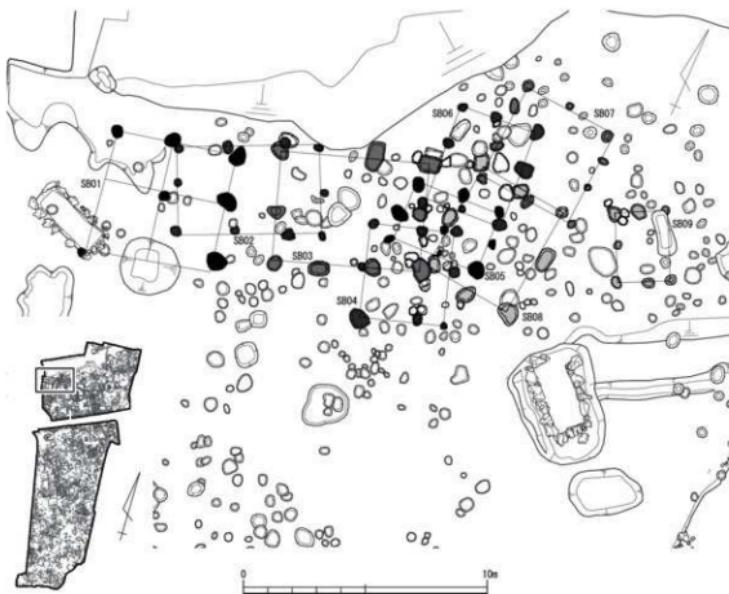
計142棟の建物を復元した(第79図・附表1~27)。多くの建物は、調査後に平面図を合成し、その過程において復元されたものである。このため、建物としての遺構写真はわずかである(写真同版38~42)。復元された建物は、調査区の北端部から南端部まで認められ、特に北地区から南地区北半にかけて集中する傾向が認められる。多くの建物は数棟が平面的に集中してみられる傾向が認められ、20の建物群を抽出することができた。

これらの建物群は、平面的に集中する建物を便宜上一括したもので、建物の方位・時期等は考慮したものではない。またいずれの建物群においても、時期的に古墳時代から中世にかけてと、時期幅を有するものであることを明記しておきたい。建物の時期ごとの分布等については、第7章第1節において検討する。

以下、上記の建物群単位で報告していく。ただし、建物群4については1棟のみである。またSB142とSB143についてもそれぞれ単独で復元されているため、建物群のなかには位置付けられていない。

### 2. 建物群1

SB01からSB09の9棟の建物からなる(第80図)。北地区北西部に位置する。建物群2の北側にあたる(第79図)。



第80図 建物群1

## SB01(附表1)

**検出状況** 建物群1の西側に位置する。建物全体が検出され、SB02と平面的に一部一致する(第80図)。

本建物のP2が、SB02のP1に切られている。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ2間×2間の総柱建物である(第81図)。ただし南梁行の中間柱については、後世の攪乱により欠く。また西桁行の中間柱についても検出できなかった。梁行・桁行ともほぼ同規模で、平面形はほぼ方形に近い。建物の規模は、北梁行(P1-P3)で5.15m、東桁行(P3-P5)で4.50mを測り、両者を基準とした面積は23.17m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向はN 16° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表1の通りである。

**柱 穴** 西桁行と南梁行の中間柱を除く柱穴が検出されている。柱穴の規模は、P1・P6・P7を除いてはほぼ同規模である。50cm~80cm大と、全体的に大型である。柱穴の平面形は、全体的に梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂~細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められないが、P5の底部にはやや扁平な石が置かれていた。各柱穴の規模は附表1の通りである。

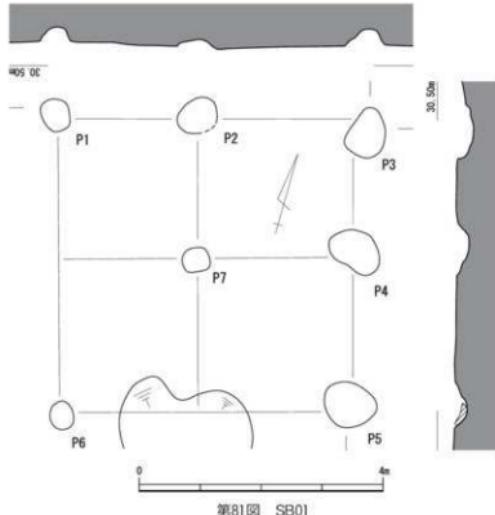
**出土遺物** P2・P4・P5・P7から出土している。いずれも小片で、図化できたものはない。

**P2出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面がヘラ削り、外面がハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。

**P4出土土器** 土師器の壺の口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は壺Ecに分類されるもので、丸胴タイプの壺と復元される。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の口縁部片と体部片が出土している。口縁部片の外面には煤の付着が認められる。この他、丸胴タイプの体部片も出土している。須恵器は壺の体部片と、杯の口縁部片が出土している。

**P7出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯Aの底部片と壺が出土している。壺は壺



第81図 SB01

Eaの口縁部片と、長胴タイプの口縁部片が出土している。須恵器は、杯の底部から体部にかけての一部と、口縁部の小片が出土している。

時 期 SB02との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向等から判断して、南構Ⅷ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB02(附表1)

検出状況 建物群1の西側に位置する(第80図)。建物全体が検出され、SB01・SB03と平面的に一部重複している。本建物のP1とP3が、SB01のP2とSB03のP1をそれぞれ切っている。逆にP7とP8は他の柱穴に切られている。

建 物 ほぼ東西方向に棟軸をもつ、梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第82図)。建物全体が検出されている。梁行・桁行ともそれぞれ平行し、平面形はほぼ長方形に近い。ただし、北桁行と東梁行においては柱通りがやや乱れている。また桁行における柱穴間距離は南北とも一定ではない。両者とも東側の柱間が明らかに短くなっている。建物の規模は、西梁行(P1-P9)で3.40m、南桁行(P6-P9)で6.00mを測り、両者を基準とした平面積は20.40m<sup>2</sup>である。南桁行の直交方向を基準とした棟軸方向はN22°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表1の通りである。

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。柱穴の規模はほぼ同規模である。柱穴の平面形は、全体的に円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表1の通りである。

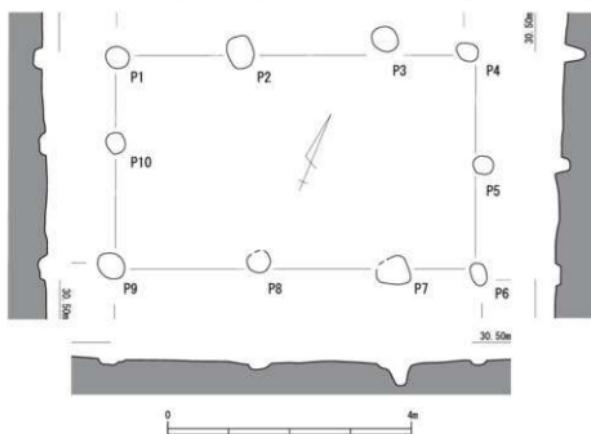
出土遺物 P2・P7・P8から出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

P2出土土器 土師器の壺の体部の小片が出土している。

P7出土土器 土師器の壺の体部片が出土している。長胴タイプに分類されるものである。

P8出土土器 土師器の杯もしくは碗の口縁部の小片が出土している。

時 期 SB01との切り合い関係・出土遺物から、南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第82図 SB02

## SB03(図版11 写真団版73・149 附表1・36)

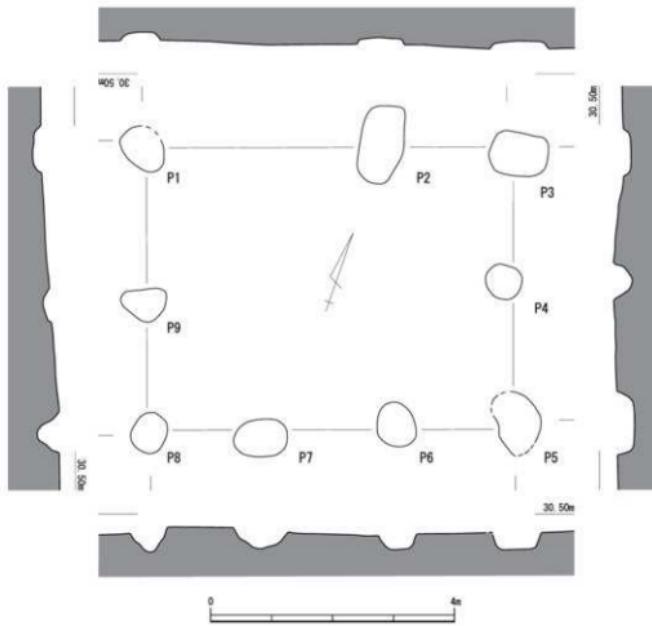
**検出状況** 建物群1内に位置し、建物全体が検出されている。SB02・SB04・SB05と平面的に重複する(第80図)。P1がSB02のP3に切られ、P5がSB08のP7を、P6がSB04のP8をそれぞれ切っている。またSB01の東側に位置し、棟軸方向がほぼ一致する。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ、梁行2間、桁行3間からなる隅柱建物である(第84図)。桁行・梁行とも平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。柱通りも全体的に良好である。ただし、北桁行の1穴を欠いている。建物の規模は、南桁行(P5-P8)で6.00m、西梁行(P1-P8)で4.70mを測り、両者を基準とした建物の面積は28.20m<sup>2</sup>である。また南桁行(P5-P8)の直交方向を基準とした棟軸方向は、N14°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表1の通りである。

**柱 穴** 北桁行の1穴を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は、隅丸方形傾向にあるものが目立つ。規模についても60cmを超える、全体的に大型である。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土は、いずれも黒灰色シルト混じり極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表1の通りである。



第83図 P3断面



第84図 SB03

**出土遺物** P3・P4・P7・P8から出土している(図版11)。

**P3出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯Aの底部片と甕が出土している。甕は、甕Ecの口縁部片と体部片が出土している。いずれも丸胴タイプに分類されるものである。

須恵器は楕の口縁部片が出土している。

**P4出土土器** 土師器の楕と甕の小片が出土している。楕は体部の小片で、内面には赤彩が認められる。甕は長胴タイプの体部片が出土している。

**P7出土土器** 土師器の楕(260)と甕が出土している。260は楕A4に分類されるもので、底部がヘラ切り後ナデにより、体部から口縁部内外面が回転ナデにより仕上げられている。甕は、甕Gcの口縁部片と体部の小片が出土している。前者の外面上には煤の付着が認められる。後者は丸胴タイプに分類でき、外面上はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

**P8出土土器** 土師器・須恵器・縄袖陶器が出土している。

土師器 甕の体部の小片で、外面上はハケにより仕上げられ、煤の付着が認められる。

須恵器 盆A(261)の1点が出土している。盆Acに分類されるもので、口縁部は大きく折り返され、外反している。底部の切り離しは回転ヘラ切りにより、その後ナデが加えられている。口縁部内外面は回転ナデにより仕上げられている。

**縄袖陶器** 楕の1点(262)が出土している。体部から口縁部にかけて残存する。口縁部はaタイプに分類されるもので、口縁端部は内側に折り返すような回転ナデにより、わずかに玉縁状をなしている。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

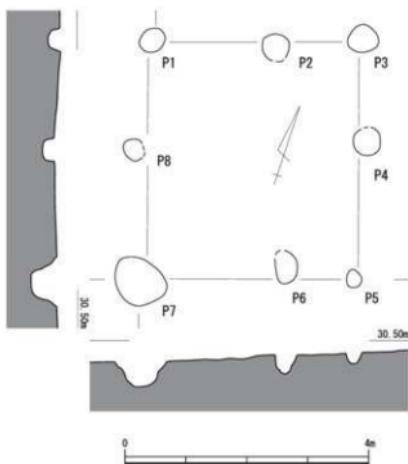
時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB04(附表1)

**検出状況** 建物群1の中央部、SB01とSB02の東側に位置する(第80図)。建物全体が検出されているが、SB03・SB05・SB08と平面的に重複している。このなかで、P8がSB03のP6に切られている。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の隅柱建物である(第85図)。梁行については平行関係にあるが、桁行については東西両側とともに柱通りの乱れが認められる。平面形的には整った長方形をなしている。ただし、南北両梁行の中間柱が中間より東側に寄った位置にある。

建物の規模は、北梁行(P1-P3)で3.45m、東桁行(P3-P5)で3.90mを測り、两者を基準とした建物の面積は13.45m<sup>2</sup>である。東桁行を基準とした棟軸方向は、N 17° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表1の通りである。



第85図 SB04

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。ただし、P2・P4・P6・P8は他の柱穴に切られている。平面形は円形傾向にあるものが多く認められる。柱穴の規模はほぼ同規模であるが、P7のみ際だって大型である。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表1の通りである。

**出土遺物** P1・P4・P7から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P1出土土器** 須恵器の杯の天井部片が出土している。

**P4出土土器** 土師器が2点出土している。1点は杯もしくは碗の口縁部片で、内外面に赤彩が認められる。もう1点は壺の体部の小片である。

**P7出土土器** 土師器の壺の体部片が出土している。内面はヘラ削りにより、外面はハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

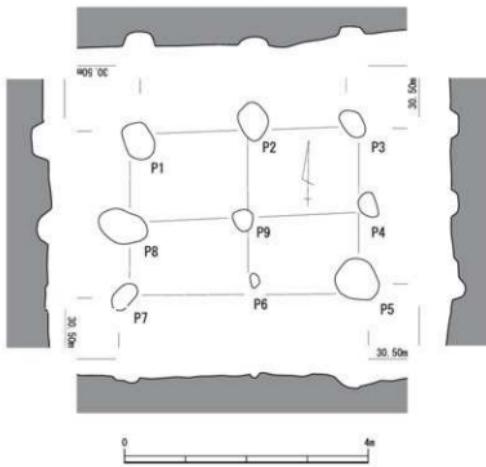
**時 期** SB03との切り合い関係・出土遺物から、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB05(図版11 附表1・36)

**検出状況** 建物群1の中央部に位置する(第80図)。建物全体が残存し、SB03・SB04・SB06・SB08と平面的には重複している。このなかで、本建物のP6がSB08のP7に切られている。他の建物との前後関係は調査では明らかにできなかった。

**建 物** ほぼ東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の総柱建物である(第86図)。梁行・桁行とも柱通りに乱れが認められる。建物の規模は、南桁行(P5-P7)で3.80m、東梁行(P3-P5)・西梁行(P1-P7)とも2.60mを割り、両者を基準とした平面積は9.88m<sup>2</sup>と小型である。東梁行の直交方向を基準とした棟軸方向は、N 1° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表1の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されているが、その規模には差が認められる。P5・P8は70cmを超えるが、P9は40cm未満である。特にP6については極端に小型である。柱穴の平面形は、全体的に梢円形も



第86図 SB05

しくは隅丸長方形傾向にある。埋土はいずれも黒灰色シルト混じり極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表1の通りである。

**出土遺物 P2・P3・P8** から土器が出土している(図版11)。263を除いては、小片のため図化できなかつた。

**P2出土土器** 土師器の杯もしくは椀と甕が出土している。杯もしくは椀は口縁部の小片で、内外面に赤彩が認められる。甕は体部の小片が出土している。

**P3出土土器** 土師器の甕(263)が出土している。口縁部を中心に残存し、甕Ecに分類される。断面「く」字形をなし、端部は横ナデにより方形をなしている。体部外面は縱方向のハケにより、内面は不定方向のヘラナデにより仕上げられている。その後、口縁部内面を横ハケによる調整後、内外面とも強い横ナデにより仕上げられている。口縁部外面には、口縁部を外側に折り返した際の指頭圧痕が認められる。

**P8出土土器** 須恵器の甕の体部片が出土している。外面は叩き整形により、内面は当て具痕がナデにより消されている。

**時期** SB08との切り合い関係・出土遺物から判断して、VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB06(附表2)

**検出状況** 建物群1東部に位置し、SB05・SB07・SB08と平面的に重複している。これらの建物との切り合い関係は認められず、建物全体が検出されている(第80図)。

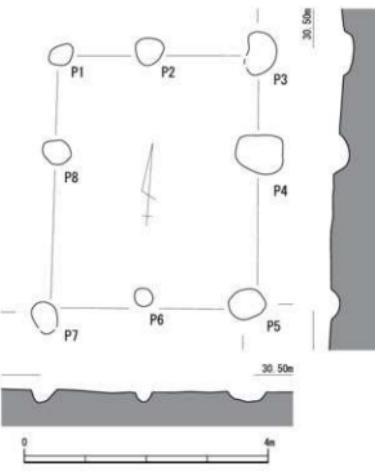
**建物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第87図)。桁行・梁行とともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし南梁行の柱通りはやや乱れている。また東西両側の中間柱は、それぞれ北側に偏った位置にある。建物の規模は、北梁行(P1-P3)で3.30m、東桁行(P3-P5)で4.10mを測り、两者を基準とした建物の面積は13.53m<sup>2</sup>である。東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向は、N4°00'Wを示している。

**柱穴** 全ての柱穴が検出されている。柱穴の平面形は隅丸方形から円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表2の通りである。

**出土遺物** P4から土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 梗と甕が出土している。梗は体部の小片で、内外面に赤彩が認められる。甕は口縁部片と体部の小片が出土している。口縁部片は断面が方形をなすものである。体部の小片は内面がヘラ削り、外側がハケにより仕上げられている。

**須恵器** 梗の口縁部を中心とした小片が出土している。



第87図 SB06

**時期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB07(附表2)

**検出状況** 建物群1の北東部に位置し、建物全体が検出されている(第80図)。SB06・SB08と平面的に重複している。ただしこれらの建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の側柱建物である(第88図)。北梁行と東桁行の柱通りに乱れが認められる。このため台形気味の平面形をなしている。

建物の規模は、南梁行(P6-P8)で4.15m、西桁行(P1-P8)で4.25mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.63m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN3°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表2の通りである。

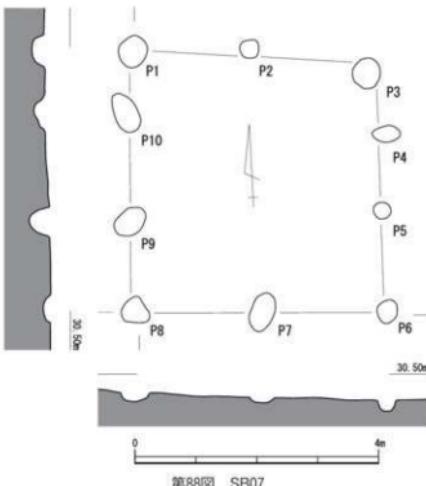
**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。全体的に50cm以下が多く、小型の柱穴で構成されている。平面形は、梢円形傾向にあるものが多く認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表2の通りである。

**出土遺物** P10から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**土師器** 壺の体部片が出土している。丸胴タイプの壺で、内面はハラ削りにより、外面はハケにより仕上げられている。

**須恵器** 杯蓋の体部片が出土している。焼成不良の製品である。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる(第7章第1節)。



第88図 SB07

## SB08(図版11 附表2・36)

**検出状況** 建物群1の東側に位置し、建物全体が検出されている(第80図)。SB04～SB07と平面的に重複している。このなかでP7がSB03のP5に切られている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにすることはできなかった。

**建 物** ほぼ南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第89図)。梁行・桁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし、南北の梁行において柱通りの乱れが認められる。建物の規模は、南梁行(P5-P7)で3.65m、西桁行(P1-P7)で4.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は17.52m<sup>2</sup>である。西桁行を基準とした棟軸方向はN3°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表2の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。このなかでP1・P2・P7は他の柱穴に切られている。P3を除いてはその規模は60cm以上を測り、全体的に大型の柱穴で構成されている。平面形は、隅丸長方形

傾向にあるものが多く認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表2の通りである。

**出土遺物 P1・P3・P7** を除く各柱穴から土器が出土している(図版11)。このなかで図化できたのは、P2から出土した土師器と須恵器に限られる。

**P2出土土器** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 杯A・壺・鍋が出土している。杯Aは底部の小片が出土している。壺は、口縁部(壺Ic)と体部片が出土している。口縁部片は長胴タイプに分類されるものである。体部片は、外面がハケにより、内面がヘラミガキに近いヘラナデにより仕上げられ、外面には煤の付着が認めら

れる。

鍋は266の1点が出土している。口縁部を中心に残存し、鍋Aaに分類される。外面は縱方向のハケの後ナデにより、内面は口縁部を横方向のハケの後ナデにより仕上げられた後、口縁部内外面がやや強い横ナデにより仕上げられている。その後、体部が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 杯B蓋(264)と杯B(265)が出土している。264は口縁部を中心に残存し、杯B蓋Aaに分類される。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。265は杯Ba10に分類される。底部を回転ヘラ切りにより切り離され、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

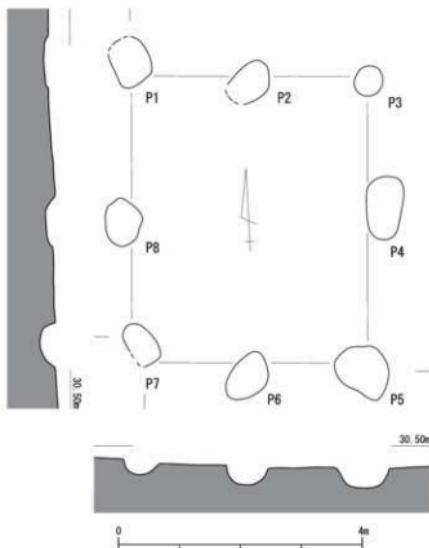
**P4出土土器** 土師器と須恵器が出土しているが、須恵器については小片のため器種の特定も困難である。土師器は杯もしくは壺の体部小片と壺が出土している。壺は丸胴タイプの体部片と、長胴タイプの口縁部片が出土している。後者は体部がわずかに残存し、内外面ともハケにより仕上げられている。

**P5出土土器** 壺もしくは杯の体部片が出土している。内外面に赤彩が認められる。

**P6出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。丸胴タイプに分類されるもので、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。須恵器は皿の底部片が出土している。

**P8出土土器** 土師器の壺が出土している。丸胴タイプに分類される口縁部片2点(壺Gd・壺Ec)が出土している。

時 期 SB03との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅷ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。



第89図 SB08

## SB09(附表2)

**検出状況** 建物群1の東側に位置し(第80図)、建物全体が検出されている。SB08の東側に位置する。P1が柱穴に、P3が土壤に切られている。本書で報告する建物の中では小型の建物である。

**建 物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第90図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。建物の規模は、南梁行(P4-P6)で2.25m、西桁行(P1-P6)で2.80mを測り、両者を基準とした建物の面積は6.30m<sup>2</sup>である。また西桁行(P1-P6)を基準とした棟軸方向は、N 28° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表2の通りである。

**柱 穴** 東桁行の中間柱1穴を除いて、すべての柱穴が検出されている。検出面からの深さは10cm未満が多く、最も深いものでP4の19cmと、全体的に浅い傾向にある。柱穴の平面形は隅丸方形もしくは円形傾向にある。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土は、いずれも黒褐色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表2の通りである。

**出土遺物** P2から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。土師器は、椀杯類と壺が出土している。椀杯類は体部片が出土しており、内外面に赤彩が認められる。壺は丸胴タイプの体部片で、内面がヘラ削り、外表面がハケにより仕上げられている。

須恵器は壺の体部片が出土している。

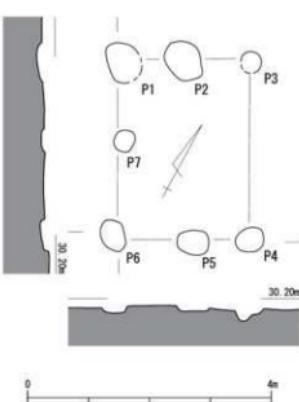
**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅳ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## 3. 建物群2

北地区の中央部西側、建物群1の南側、建物群3の北西側に位置する建物群である(第79図)。南側で単独で検出されたSB20を含め、計11棟(SB10～SB20)の建物からなる(第92図)。



第91図 建物群2の調査



第90図 SB09

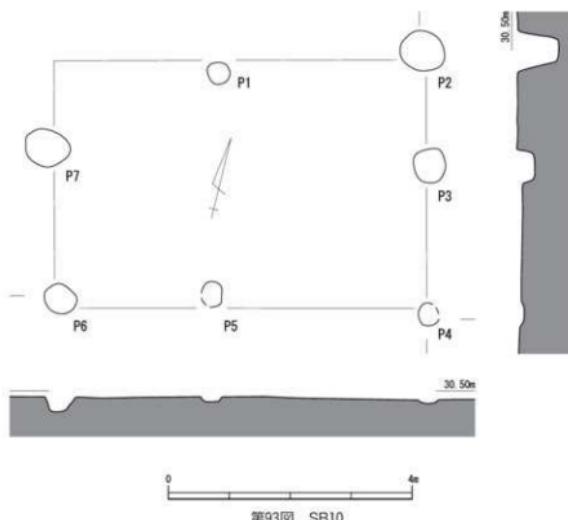


第92図 建物群2

## SB10(附表2)

**検出状況** 建物群2の北端に位置する(第92図)。SB11とは南辺を中心に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物全体が検出されているが、北西の隅柱を検出することはできなかった。

**建物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第93図)。全体的に整った平面形をなしている。柱通りについても比較的良好である。建物の規模は、南桁行(P4-P6)で6.05m、東梁行(P2-P4)で4.30mを測り、両者を基準とした面積は26.01m<sup>2</sup>である。また、南桁行(P4-P6)の直交方向を基準とした棟軸方向は、N13°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表2の通りである。



第93図 SB10

**柱穴** 北西の隅柱を除く全ての柱穴が検出されている。柱穴間の規模に差が認められ、P1とP2は検出面からの深さが70cm前後を測る。平面形は隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表2の通りである。

**出土遺物** P2とP3から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

P2出土土器 土師器の杯Aと甕が出土している。杯Aは底部片が、甕は体部の小片が出土している。

P3出土土器 土師器の杯と甕が出土している。杯は口縁部の小片で、精良な胎土である。甕は、いずれも丸胴タイプに分類される甕Eaと甕Ecが出土している。

**時期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

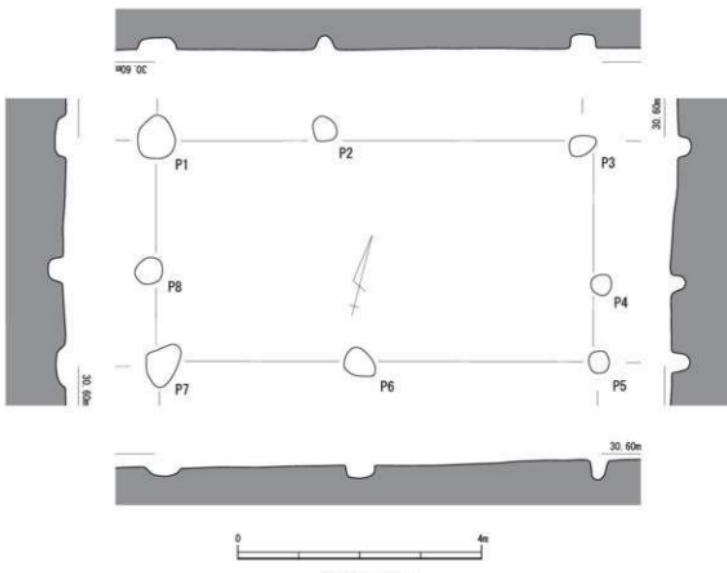
#### SB11(附表3)

**検出状況** 建物群2の北側、SB10の南側、SB12の西側に位置する(第92図)。SB10と一部平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物全体が検出されている。

**建物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第94図)。全体的に柱通りに乱れが認められる。建物の規模は、南桁行(P5-P7)で7.20m、西梁行(P7-P1)で3.80mを測り、両者を基準とした面積は27.36m<sup>2</sup>である。また、南桁行(P5-P7)の直交方向を基準とした棟軸方向は、N14° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表3の通りである。

**柱穴** 全ての柱穴が検出されている。P1とP7を除いては、比較的小型の柱穴により構成されている。平面形は梢円形もしくは円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表3の通りである。

**出土遺物** P4から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。



第94図 SB11

**土器** 壺の体部片が出土している。内外面ともハケにより仕上げられている。

**須恵器** 杯の小片が出土している。

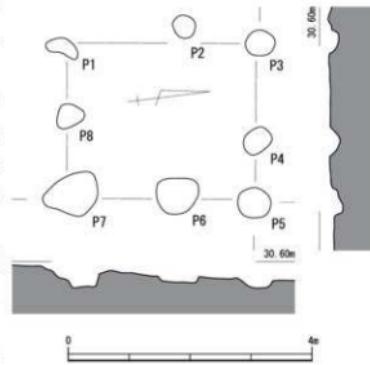
**時期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

### SB12(附表3)

**検出状況** 建物群2の中央部北側に位置し(第92図)、建物全体が検出されている。SB11の東側、SB16の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。本書で報告する建物のなかでは小型の建物である。

**建物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる側柱建物である(第95図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし、北桁行の柱通りに乱れが認められる。

建物の規模は、北梁行(P3-P5)で2.60m、東桁行(P5-P7)で3.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は7.80m<sup>2</sup>である。東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向は、N7°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表3の通りである。



第95図 SB12

柱 穴 全ての柱穴が検出されている。P 1(第96図)の平面形が三日月形をなすが、底部が辛うじて検出された結果と考えられる。

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表3の通りである。

出土遺物 P 7とP 8から土器が出土している。いずれも小片のため固化できなかった。

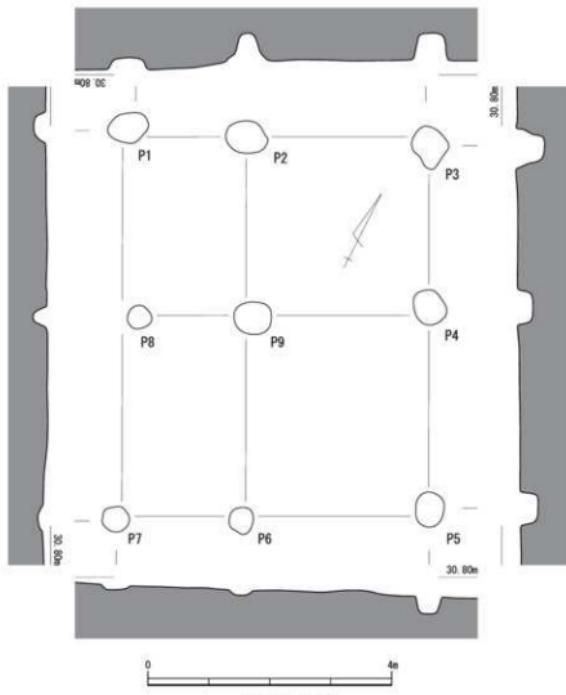
P 7出土土器 須恵器の杯もしくは杯蓋の小片が出土している。

P 8出土土器 丸胴タイプに分類される土師器の壺の体部が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる。



第96図 SB12-P 1断面



第97図 SB13

## SB13(図版11 附表3・36)

**検出状況** 建物群2中央部西側にあたり、SB17の西側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくし、隣接している(第92図)。SB14・SB15・SB18と平面的に重複しているが、調査ではSB15・SB18とは前後関係を明らかにすることはできなかった。特にSB14とは棟軸方向をほぼ同じくし、SB14のP1を切っている。建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の総柱建物である(第97図)。桁行・梁行とも平行関係にあるが、南西桁行の柱通りに乱れが認められる。また両梁行の中間柱は南西側へ偏った位置にある。建物東柱(P9)についても同様である。建物の規模は、北東桁行(P3-P5)で5.95m、南東梁行(P5-P7)で5.15mを測り、ほぼ同規模である。両者から復原される建物の面積は30.64m<sup>2</sup>である。北東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向は、N26°30'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表3の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。P6・P7・P8を除いてはほぼ同規模の柱穴からなる。平面形は円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表3の通りである。

**出土遺物** P2・P3・P5から土器が出土している。P2出土の土師器を除いては、小片のため図化できなかった。

**P2出土土器** 土師器の椀(267)と壺が出土している。267は底部から体部にかけて残存し、椀Cbに分類される。底部は回転糸切りにより切り離され、体部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。壺は体部の小片で、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

**P3出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は椀の底部片が出土している。須恵器は壺の体部片が出土している。内面には當て具痕が認められる。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。長胴タイプに分類される壺である。須恵器は椀の口縁部片が出土している。

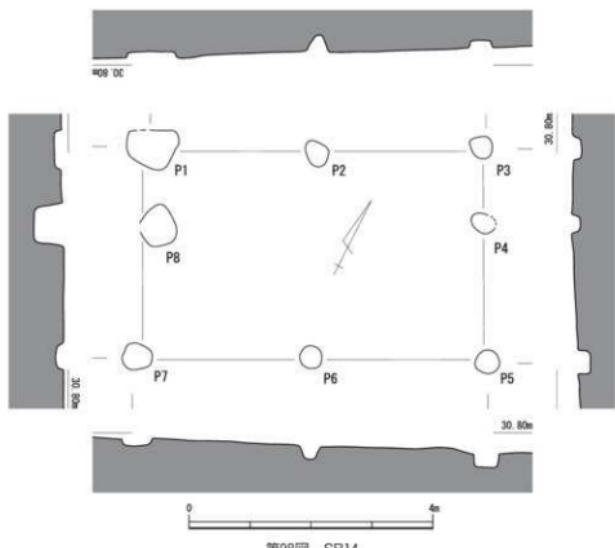
**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

## SB14(附表3)

**検出状況** 建物群2中央部西側にあたり、SB17の西側に位置し、棟軸方向をほぼ同じくし、隣接している(第92図)。SB13・SB15・SB18と平面的に重複している。このなかで、本建物のP1がSB13のP1に切られている。この他、P4がSB16のP9に切られている。他の建物との前後関係については、調査では明らかにできなかった。またSB13とは棟軸方向をほぼ同じくし、大半がSB13と重複している。建物全体が検出されている。

**建 物** 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第98図)。桁行・梁行とも平行関係にあるが、南西梁行の柱通りに乱れが認められる。また両梁行の中間柱は北西側へ偏った位置にある。建物の規模は、南東桁行(P5-P7)で5.75m、北東梁行(P3-P5)で3.50mを測り、両者から復原される建物の面積は20.12m<sup>2</sup>である。南東桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN63°30'Eを示している。各柱穴間の距離等は附表3の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。P1とP8を除いては小規模な柱穴からなる。柱穴の平面形は、円形もしくは梢円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また



第98図 SB14

柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表3の通りである。

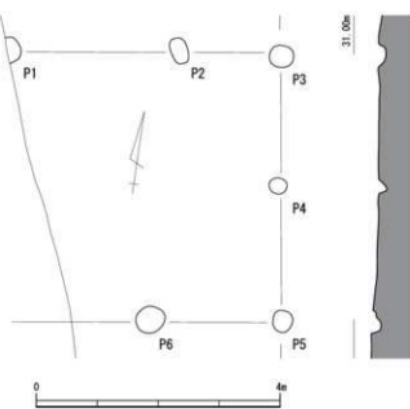
出土遺物 P6から土師器と須恵器が出土している。いずれも小片ため固化できなかった。土師器は杯の体部の小片が出土している。内外面に赤彩が認められる。須恵器は杯もしくは蓋の体部片が出土している。

時 一期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB15(附表3)

検出状況 建物群2の中央部西側に位置する(第92図)。建物西側は調査区外へ抜がっており、検出された範囲は全体の1/2前後と考えられる。SB13・SB14と平面的に重複している。ただしこれらの建物との切り合い関係は認められず、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。

建 物 東西方向に棟軸をもつ梁行2間からなる側柱建物である(第99図)。桁行については、2間分が検出されている。南北の桁行は平行関係にあり、全体的に整った平面形をなしている。ただし中間



第99図 SB15

柱の位置は、北側(P2)と南側(P6)では対応する位置ではない。建物の規模は、東梁行(P3-P5)で4.35mを測る。北桁行(P1-P3)を基準とした棟軸方向はN81°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表3の通りである。

**柱 穴** 6穴の柱穴が検出されている。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形傾向にあり、ほぼ同規模である。柱痕が確認された柱穴は認められない。埋土はいずれも暗灰色極細砂1層からなる。各柱穴の規模は附表3の通りである。

**出土遺物** 全く出土していない。

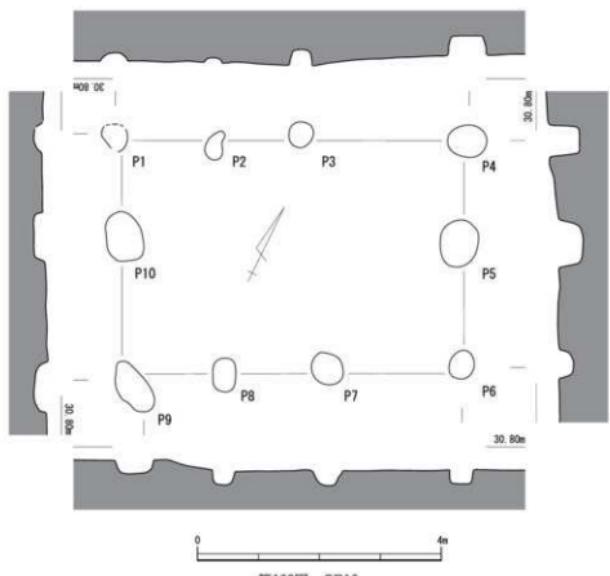
**時 期** 建物の棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB16(附表4)

**検出状況** 建物群2の中央部に位置し、SB13・SB14の東側に位置する(第92図)。SB12・SB17と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。P9がSB14のP4を切っている。建物全体が検出されている。

**建 物** 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行3間の個柱建物である(第100図)。梁行・桁行ともに平行関係にあり、平面形は整った長方形をなしている。柱通りについても梁行・桁行とも良好である。ただし両梁行の中間柱は北西側へ寄った位置にある。建物の規模は、北西桁行(P1-P4)で5.75m、北東梁行(P4-P6)で3.70mを測り、復原される建物の規模は21.27m<sup>2</sup>である。北西桁行(P1-P4)を基準とした棟軸方向はN64°00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表4の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。これらの柱穴は規模・平面形とも一定していない。平面形に



第100図 SB16

については、不定形なものから楕円形・隅丸方形のもの等が認められる。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる(第101図)。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表4の通りである。

**出土遺物 P3・P4・P5・P10**から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかつた。

**P3出土土器** 土師器の壺の体部片が出土して



第101図 SB16-P3断面

いる。丸胴タイプに分類されるもので、内面はヘラ削り、外面はハケにより仕上げられている。

**P4出土土器** 土師器の杯Aと壺が出土している。杯Aは底部が残存し、内面に赤彩が認められる。壺は体部片が出土している。丸胴タイプに分類されるもので、外面に煤の付着が認められる。

**P5出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。丸胴タイプに分類される壺で、内面はヘラ削りにより仕上げられている。須恵器は壺の体部片が出土している。内面はナデにより仕上げられ、外面はカキ目を施した後ナデが加えられている。

**P10出土土器** 土師器の杯もしくは碗の底部片が出土している。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB17(図版11 附表4・36)

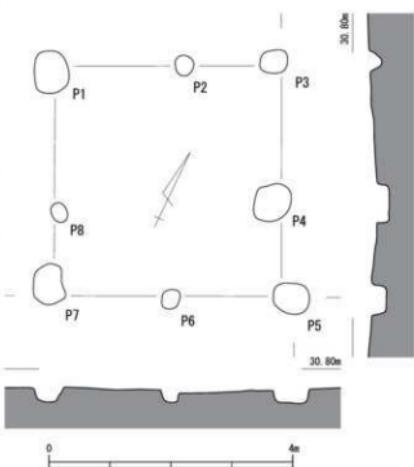
**検出状況** 建物群2中央部に位置する。SB19の西側に位置し(第92図)、SB13の東側に棟軸方向を同じくして隣接している。SB16・SB18と平面的に一部が重複しているが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。建物全体が検出されている。

**建 物** 北西-南東方向に棟軸をもつ梁

行2間、桁行2間の側柱建物である(第102図)。桁行・梁行とも平行関係にあるが、両桁行を中心には柱通りに乱れが認められる。また両桁行の中間柱は南東側へ偏った位置にある。建物の規模は、北東桁行(P3-P5)で3.90m、南東梁行(P5-P7)で4.00mを測り、ほぼ同規模である。両者から復原される建物の面積は15.60m<sup>2</sup>である。また、北東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向は、N25°00'Wを示している。各柱穴間の距離等は附表4の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。

柱穴の規模に差が認められるが、大型の柱穴の平面形は隅丸方向傾向にある。小型の柱穴については円形の傾向が認められる。



第102図 SB17

埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。

各柱穴の規模は附表4の通りである。

出土遺物 P1・P4・P5から土器が出土している。

**P1出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は、杯の口縁部片(268)と椀Aの底部片・甕の体部片が出土している。268は外外面に赤彩が認められる。須恵器は椀の底部の小片が出土している。底部の切り離しは不明である。

**P4出土土器** 土師器の甕もしくは鍋の小片が出土している。

**P5出土土器** 土師器の甕の体部片が出土している。外面はハケにより仕上げられている。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

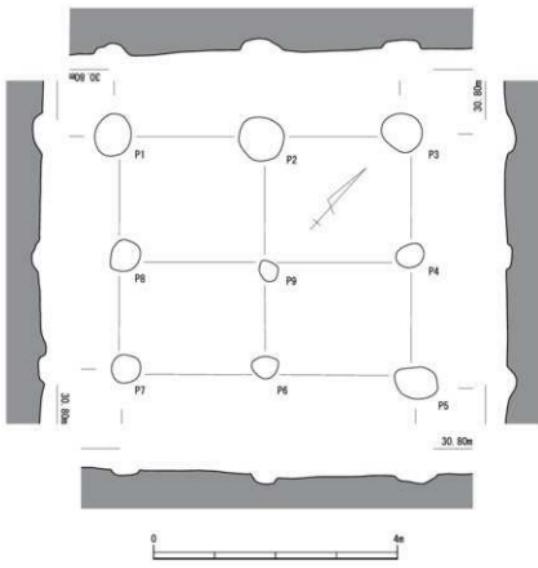
#### SB18(写真図版38 附表4)

検出状況 建物群2の中央部に位置し(第92図)、建物全体が検出されている(第103図)。SB13の東側、SB16の南側に位置する。SB13・SB14・SB17と平面的に重複しているが、柱穴相互の切り合い関係は認められない。

建 物 北東-南西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間からなる総柱建物である(第104図)。桁行・梁行ともに平行関係にあり、全体的に整った平面形



第103図 SB18の調査



第104図 SB18

をなしている。建物の規模は、北西桁行(P1-P3)・南東桁行(P5-P7)とも4.80m、北東梁行(P3-P5)で4.00mを測り、両者を基準とした建物の面積は19.20m<sup>2</sup>である。また、北東梁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向はN41°30' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表4の通りである。

**柱 穴** すべての柱穴が検出されている(第103図)。柱穴の平面形は、隅丸方形もしくは円形傾向にある。平面の規模は、50cmを超えるものと超えないものが認められる。いずれの柱穴においても柱痕は確認されていない。埋土はいずれも暗黒灰色シルト混じり極細砂1層からなるが、P5内には黄褐色極細砂の混入が認められる。各柱穴の規模は附表4の通りである。

**出土遺物 P1・P2・P8** から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P1出土土器** 土師器の甕Gdと甕の部片が出土している。体部片は外面に煤の付着が認められる。

**P2出土土器** 須恵器の杯もしくは杯蓋の小片が出土している。焼成不良の小片である。

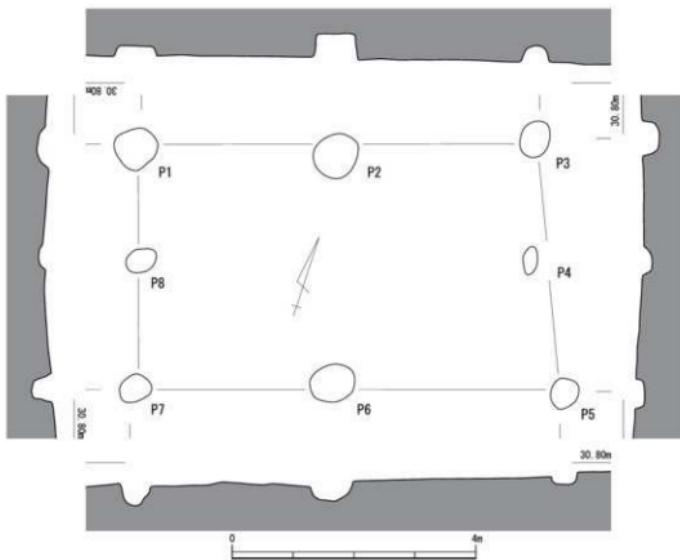
**P8出土土器** 土師器の甕Gdと須恵器の器種が特定できない小片が出土している。

**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VI期に位置付けられる。

#### SB19(図版11 附表4・36)

**検出状況** 建物群2の東部に位置する。SB16・SB17の東側にあたる(第92図)。他の建物とは平面的に重複せず、切り合い関係も認められない。建物全体が検出されている。

**建 物** 東西方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第105図)。桁行は平行関係にあるが、規模が異なるため建物の平面形は台形状をなしている。柱通りについては、東梁行を除いては良好である。建物の規模は、南桁行(P5-P7)で7.00m、西梁行(P7-P1)で3.95mを測り、復原され



第105図 SB19

る建物の面積は $27.65\text{m}^2$ である。南桁行(P5-P7)を基準とした棟軸方向はN72° 00' Eを示している。各柱穴間の距離等は附表4の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されている。両梁行の中間柱が他の柱穴より際だって小型である。平面形については、楕円形もしくは隅丸方形の傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表4の通りである。

**出土遺物** P2・P3・P6・P7から土器が出土している(図版11)。

**P2出土土器** 須恵器の杯もしくは碗の口縁部片が出土している。

**P3出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土しており、内面はヘラ削りにより仕上げられている。須恵器は杯(269)と杯Aの底部片が出土している。269は体部から口縁部にかけて残存する個体で、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の壺Ecの口縁部片が出土している。長胴タイプに分類されるタイプである。

**P7出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は壺の体部片が出土している。内面はヘラ削りにより、外面はハケにより仕上げられ、外面には煤の付着が認められる。須恵器は壺の体部片が出土している。

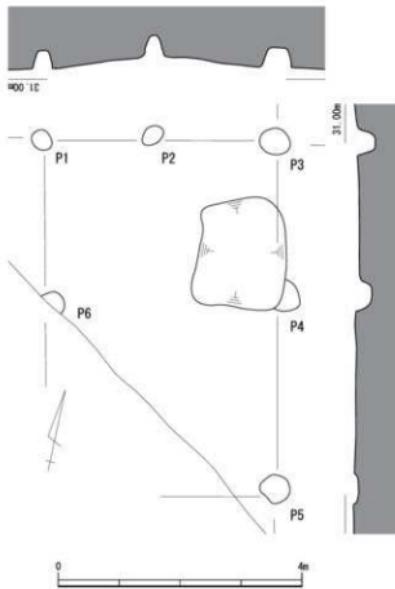
**時 期** 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構VII-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB20(図版11 写真図版74 附表4・36)

**検出状況** 建物群2に含まれる建物として報告するが、建物群2の南側にやや離れて所在する建物である。SB13の南側に位置する(第92図)。建物の南西隅は調査区外に広がっており、全体は検出されていない。建物北東部は後世の擾乱を受けている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

**建 物** 他の建物の規模から判断すると、建物の北側が検出されたものと判断され、南北方向に棟軸をもつ梁行2間・桁行2間の側柱建物と考えられる(第106図)。東西の桁行は平行関係にあり、梁行とも直角関係にあり、整った平面形をなしている。柱通りも検出した範囲で良好である。建物の規模は、北梁行(P1-P3)で3.85m、東桁行(P3-P5)で5.70mを測り、両者から復原される建物の面積は $21.94\text{m}^2$ である。また、東桁行(P3-P5)を基準とした棟軸方向はN12° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表4の通りである。

**柱 穴** 南西隅と南梁行中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。ただしP4につい



第106図 SB20

ては後世の擾乱を受け、一部のみの検出である。また、P6の1/2は調査区外に広がっている。柱穴は全体的に小規模で、平面形は楕円形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表4の通りである。

**出土遺物 P4とP6から土器が出土している(図版11)。**

**P4出土土器** 土師器の杯A(271)と竈の一部が出土している。

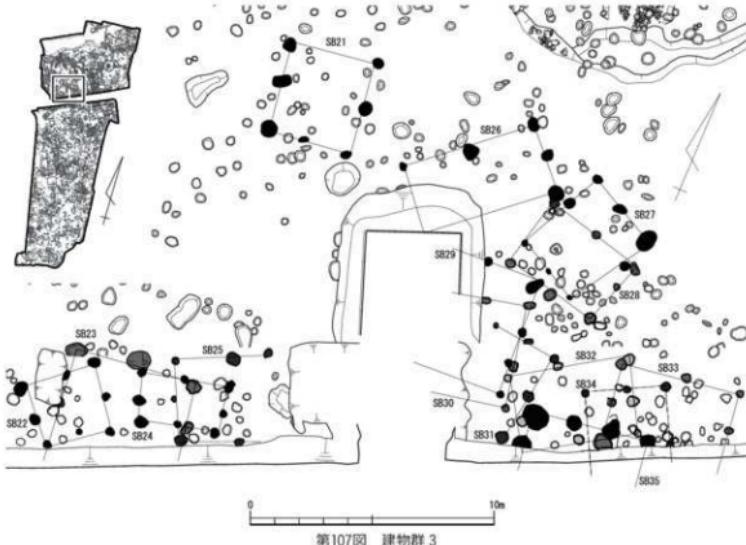
271は底部から口縁部まで残存する個体で、杯Ad4に分類される。内外面に赤彩が認められる。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、体部は外反傾向にある。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、その後ナデが加えられている。底部と体部の境外面にはヘラナデが加えられている。竈の一部については小片のため明確にできないが、底部の一部と考えられる。

**P6出土土器** 須恵器の杯B蓋(270)と壺蓋が出土している。270はつまみを欠くが、形態的特徴から杯B蓋と判断される。杯B蓋Acに分類される。内外面とも回転ナデを基調とし、一部天井部には回転ヘラ削りが加えられている。また、天井部内面には仕上げナデが認められる。また壺蓋については体部片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### 4. 建物群3

北地区の南西隅で検出された建物群である(第79図)。建物群2の南東側、建物群7の西側、建物群10の北東側にある。15棟の建物(SB21～SB35)からなる(第107図)。防火水槽を隔てて、SB22～SB25とSB26～SB35(第113図)の2群に分かれるが、本来は防火水槽の箇所にも建物があったものと考えられる。



第107図 建物群3

## SB21(附表5)

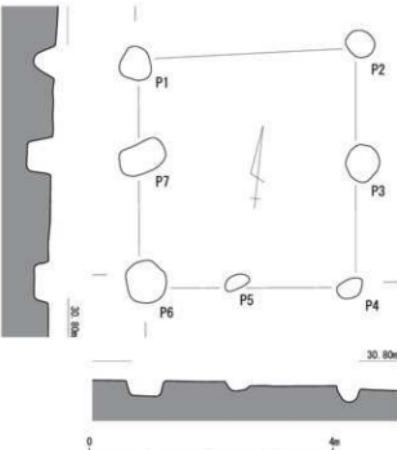
**検出状況** 建物群3の北側にあたり、SB26の北西側に位置する(第107図)。建物全体が検出され、他の建物との平面的な重複は認められない。他の遺構との切り合い関係も認められない。

**建 物** 南北方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第108図)。桁行については平行関係にあるが、梁行については平行関係にはない。柱通りは梁行・桁行とも良好である。建物の規模は、南梁行(P4-P6)で3.35m、西桁行(P6-P1)で3.60mを測り、両者から復原される建物の面積は12.06m<sup>2</sup>と小型である。東桁行(P2-P4)を基準とした棟軸方向は、N 6° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表5の通りである。

**柱 穴** 北梁行中間柱を除く全ての柱穴が検出されている。P4とP5が他より小規模である。他の柱穴の平面形は、隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

**出土遺物** 全く出土していない。

**時 期** 棟軸方向から判断して、南構Ⅳ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。



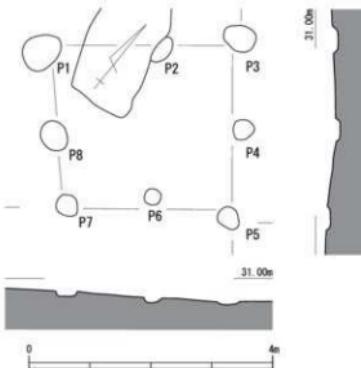
第108図 SB21

## SB22(附表5)

**検出状況** 建物群3の南西部、SB24の西側に位置する(第107図)。SB23と平面的に重複するが、調査では前後関係を明らかにすることはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められない。建物全体が検出されている。

**建 物** 北西～南東方向に棟軸をもつ梁行2間、桁行2間の側柱建物である(第109図)。両梁行の規模が異なるため桁行は平行せず、平面形は台形傾向にある。また、柱通りにも乱れが認められる。建物の規模は、南東梁行(P5-P7)で2.65m、北東桁行(P3-P5)で2.90mを測り、両者を基準とした建物の面積は7.68m<sup>2</sup>と小型の建物である。南東梁行を基準とした棟軸方向はN38° 30' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表5の通りである。

**柱 穴** 全ての柱穴が検出されているが、P2は後世の搅乱を受け、一部の検出にとどまる。柱



第109図 SB22

穴の規模は、北西梁行が大型であるのに対して、他は小型の傾向にある。いずれの柱穴とも検出面からの深さが10cm未満と浅い傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。また柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

**出土遺物 P1・P3・P5・P6** から土器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

**P1出土土器** 土師器と須恵器が出土している。土師器は杯Aの底部片が出土している。須恵器は壺と甕が出土している。壺は肩部の小片で、耳が剥離している。甕は体部の小片が出土している。

**P3出土土器** 須恵器の高杯が出土している。脚部の小片で、焼成が十分ではない製品である。

**P5出土土器** 土師器の甕が出土している。2片出土しているが、1点は外面がハケ、内面がヘラ削りにより、もう1点は外面がハケ、内面がナデにより仕上げられている。

**P6出土土器** 土師器の甕の体部小片が出土している。

時 期 出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第7章第1節)。

#### SB23(附表5)

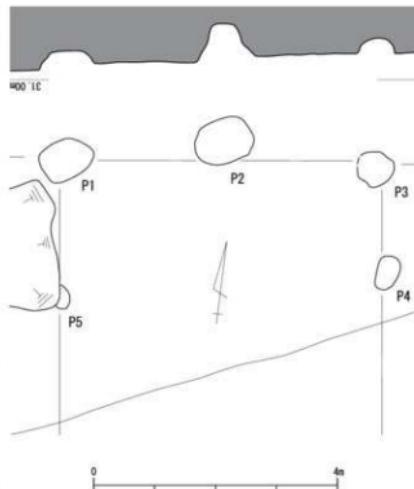
検出状況 建物群3の南西部に位置する(第107図)。SB22・SB24・SB25と平面的に重複し、P2とP3がSB24のP1とP2を切っている。他の建物との前後関係については調査では、明らかにできなかつた。建物の南側については調査区外に拡がっているものと考えられ、建物全体は検出されていない。また建物北西部の一部が後世の擾乱を受けている。

建 物 柱穴間の規模から判断して、南北に棟軸方向をとる梁行2間の隅柱建物である(第110図)。桁行の規模については、少なくとも2間はあるものと考えられる。検出した範囲で桁行は平行し、桁行と梁行は直行関係にあり、整った平面形をなしている。建物の規模は、北梁行(P1-P3)で5.10mを測る。東桁行(P3-P4)を基準とした棟軸方位はN 7° 00' Wを示している。各柱穴間の距離等は附表5の通りである。

柱 穴 建物を検出した範囲では全ての柱穴が検出されている。このなかでP5については、後世の擾乱により一部を欠く。平面形は、P5を除いては隅丸方形傾向にある。埋土はいずれも黒褐色シルト質極細砂～細砂1層からなる。柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模は附表5の通りである。

出土遺物 P1から須恵器が出土している。甕の体部片で、外面が叩きにより仕上げられ、内面には當て具痕が残存する。小片のため図化できなかった。

時 期 SB24との切り合い関係および出土遺物・棟軸方向から判断して、南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第7章第1節)。



第110図 SB23